

正倉院宝物の紙に関する調査研究

上 村 六 郎

は し が き

奈良の正倉院に残されている宝物の紙については、一昨年来、宮内庁からの依頼を受けて、同学の数人の専門学者と共同で研究を進めているが、その調査研究をやって行くためには、どうしても、正倉院文書をはじめとして、古い時代のいろいろの文献を調査する必要がある、即ちそれに依って当時の紙というものに関して広く知っておくことが肝要である。私はそういう意味で、まず文献的にいろいろの調査研究をやってみた次第である。この稿においては、そういう問題の中の、紙の材料のことについて、少しく卑見を述べて見たいと思う。

そこでまずその種類を一応あげてみる。

A. 明らかに紙の材料名と思われるもの

- I 麻紙（まし）
- II 穀紙（こくし又はかちがみ）
- III 竹幕紙（ちくまくし）
- IV 楡紙（にれがみ）
- V 檀紙（たんし）
- VI 斐紙（ひし）
- VII 葉藁紙（はわらがみ）
- VIII 杜中紙（とちうし）

B. 紙の材料名かとも考えられるもの

- IX 久木紙（ひさぎがみ）
- 附 布紙（ぬのがみ）

以上記したように、紙の材料として8種類のもものが明らかに考えられ、1種類だけが少しく疑問である。以下これ等のものについて、少しく説明を加えてみよう。

I 麻 紙

麻紙については、その後私は特別に新しい研究を行なってはいない。記録としてはかつて記したことがあるように、神亀4年の写経料紙帳に「麻紙」とあり、天平9年の写経勘紙解には「唐長麻紙」という記載もある。或は東大寺献物帳（天平勝宝8年）のように、「白麻紙」と記したものもある。麻紙という場合は、もともとは、いずれも麻を原料として漉いた紙を指したものであろう。ただ、この麻というものが当時2種類使われていて、即ち、大麻も苧麻も、いずれも麻と称されているので、そのどちらを指すかの区別は、紙の名称の上では使い分けされていないのである。万葉集などを見ても、時として麻を「あさ」と言い、苧麻（ちよま即ちからむし）を「を」と言って、区別して使うこともあるが、しかし両方とも一緒にして「あさ」と総称している場合もあるので、その区別が必ずしも明かではない。なお、麻紙について参考までに記しておく、天平時代の文書には、麻という字を、必ずしも「あさ」の意味だけでなしに、「紙の原料」の意味に使うこともある。例えば宝亀5年の図書寮解を見ると、紙もしくは紙の原料を納めた国の名とその材料名とをあげているが、その中に、「穀皮」と並んで「斐麻」とか「紙麻」とか書いている。これは即ち「麻」とあっても本来の「あさ」の意味ではなく、斐麻とは斐紙（ひし即ちがんび）を漉く原料のことであり、要するに雁皮（がんび）の木の皮のことである。また紙麻は紙漉きの原料ということで、実際は多分、穀（かち）の木の皮などが主であろう。このことからして考えると、当時「麻紙」と称したものが、必ずしも麻を原料とした紙に限られていたかどうかはやや疑問である。事実、正倉院宝物として残されている当時の「麻紙」と称されたものの中にも、麻を原料とした紙以外のものもあるように思われる。このことについては、いずれ科学的な検討を加えた後に正式に発表する筈であるが、とにかく、当時の

「麻」という字が、時として別な意味を持っていることもあるという事実を、予め頭に入れておく必要があるかと思われる。なお、もう一つ念のために付け加えると、原料のことは別として、正倉院の「麻紙」と称されている紙は、とにかく、すべて原料がよく処理された、立派な紙であるという点では共通である。「唐長麻紙」と称された中国舶来の麻紙などは、恐らくはその中でも、特に代表的な美しい紙であったのであろうかと思われる。

Ⅱ 穀 紙

穀紙はかぢの木の皮を原料として漉いた紙である。この字は穀物の穀(こく)の字と似ているが、しかし少しだけ違って、即ち禾の代りに一を書いてその下に木を書く。一名栲(こう)即ち「たく」ともいう。中国の構(こう)と称する木のことで、栲の字は日本製である。穀紙は、正しくは「こうし」と読む方がよいと思うが、一般には「こくし」と読み和名は「かじがみ」である。当時はまだ楮「ちよ」即ち「かうぞ」の名が知られず、現在の「かじ」も「かうぞ」も一緒にして「かじ」と言っている。中国でも古くはこの区別がなく、漢代の辞書の「説文」には、「穀、楮也」とあり、また山海経(晋の頃の郭璞の伝に依る)には「穀」の木が見え、その説明に、「穀楮也、皮作紙……穀亦名構、名穀者、以其実如穀也」と記されている。日本で楮の字が使われたのは、恐らくは平安時代になってからであろう。即ち「本草和名」と称する本に「桴実一名穀実、穀紙一名楮紙……和名加知乃岐」として、穀も楮も共に「かぢ」と訓んだことが分かる。同じ頃の「新撰字鏡」にも、同じく「穀……楮也、加知乃木」とある。しかし当時は楮の字は用いられても、「かうぞ」という名はまだ現われていない。それが見えているのは、建長年間(鎌倉時代)に書かれた「古今著聞集」の、「かうぞの皮」を用いて「料紙に漉かせて」云々の記載が最初であろうかと思われる。尤も、以上の記載でも分かるように、或はかぢと言ひ、或はかうぞと言つても、それは同じものをいろいろに言っただけで、現在のように、この2つを区別して使っていた訳ではない。詳しいことはここでは略すが、その区別の出来たのは、少くとも江戸中期以後であろう(「和

紙研究」第15号中の拙稿参照)。

穀紙のことは、例えば神亀4年の写経料紙帳をはじめとして、天平の古文書にいくつか現われているが、中には、感宝元年、写経検定帳のように、これを「梶紙」と書いている場合もあり、また「加地紙」(天平15年、一切経本充並納紙帳)、或は「加遅之紙」(天平感宝元年と考えられる文書の返上紙注文)などとも書かれている。時としては「賀遅紙」(天平感宝元年と考えられる文書の用紙並筆墨検定文案)などとも書かれる。勿論、すべて同じ紙のことであろう。穀の字も、中にはこれに木扁をつけ、しかも禾の代りに米を書いたものもある。

天平時代には何百万枚或は何千万枚という実に多量の紙が使われたと思われるのであるが、その中でも、一番数多く使われたのは、この穀紙であろう。殊に朝廷で漉かせたと思われる「紙屋紙」以外の、即ち日本各地の地方産の紙は、その大半がこれであったのではなかろうかと思われる。地方産の紙のことは、これもいずれ他の協同研究者と一緒に正式の報告書を出す筈であるから、ここで記すのは見合わせるが、特別の地方の雁皮紙を除くと、殆どの紙漉場がどこでも一様に、穀紙即ち今の楮紙の製造を主としていたのではあるまいかと考えられる。紙漉の技術から言っても、またその原料の生産の面から言っても、これが一番やりやすい方法であったであろうと思われる。最後に一言すると、当時の木綿(ゆう)と称されたものは、この穀即ち栲の繊維製品のことである。

Ⅲ 竹 幕 紙

天平の古文書(実際には主として正倉院文書)の中に竹幕紙というものが見えており、それが竹幕を用いて造った紙であろうことは、一応誰でも考えつくことである。しかしそれではその竹幕とは果して何か。これは専門家の間に長く疑問視されていた問題である。実際に紙漉のことを知らない、所謂文献学者は、この原料たる竹幕を、竹の中にある、あの薄い、紙のような膜のことであると見え、従って、大きな竹の、その薄膜を、上手にとり出して、紙として使

ったものであろうと考えていた訳である。私なども始めは、漠然としてそう考えていた。しかしよく調べてみると、天平3年の写経目録に「竹幕紙」の名が見え、天平9年の写経勘紙解には、「竹幕紙七張」を用いて経巻の補修をしたことが記されておって、それが竹の中の、あの弱い薄膜であろうことは、どうしても考えられないところである。このことから、私は研究を新しく進めて、幕は膜であり、それは皮を指すものである。このことは、中国の「天工開物」という本を見ても明らかである。即ちそれには「皮紙」の一種として「芙蓉紙」のことをあげ、その原料たる芙蓉の木の皮のことを、「芙蓉皮」と言わずに「芙蓉膜」と記しているのである。そこで考えられることは竹幕とは、竹膜であり竹皮であり、即ち筍の皮のことであろうということである。筍の皮は、本来は「たく」であって、竹かんむりに拵の字を書くのであるが、「康熙字典」などにも、その説明に「竹皮也」とあるように、時として竹皮と称されたことが明らかである。

以上述べたような見解から、私は筍の皮を用いて、天平の当時知られていた「葉藁紙」、即ち藁の葉を原料とした紙をつくる場合と同じ方法で、この筍の皮を処理してそれで紙をつくらせて、天平時代の竹幕紙のいかなるものであるかを、実験的に確かめてみた。これらの詳しい報告は、既に「紙及パルプ」第6巻第12号に発表したのでここでは略すが、竹膜紙は、かなり丈夫な、しかも腰の強い紙である。

IV 楡 紙

楡紙については、天平感宝元年の華嚴経料紙充装漢紙法文に「既楡紙」とあり、この「既」は、皆既蝕などの既と同じく、全部という意味であるから、紙としては楡紙をあげている訳である。また、同じ年の文書と考えられている秦東人装漢紙注文には、「合211局、麻紙93局、楡紙118局」とも記されている。これ等を見ると、楡紙は楡を原料とした紙のことであり、主として装漢用即ち表具用に用いられたものであろうかと思われる。

楡の紙については、従来からいろいろの学者の研究が発表されている。即ち、

それが或は楡の皮の含んでいる粘剤を利用して漉いた紙のことではあるまいかという見方である。畏友大沢忍博士並に寿岳文章博士も同じ見解をもっておられたし、私もかつてはその説であった。しかし、既に「紙及パルプ」第12巻第10号に発表したように、麻紙と並んで楡紙が記されている点などから見ても、これを楡の維織で造った紙であると考えるのが、一番妥当であろうというように、考えが変って来た訳である。

V 檀 紙

正倉院文書を見ると、天平勝宝2年の経紙出納に、「檀紙」の名が見え、また天平15年の一切経本充並納紙帳その他にも「檀紙」の記載がある。そして、当時の檀は、和名が「まゆみ」である。それは平安時代の「倭名抄」に、「檀、音、弾、末由美、木名也」とあることから、まず間違いのないところであろうかと思われる。従来、この考に立って、天平時代の古文書に現われている「真弓紙」というのは結局檀紙と同じものを指しているというのが通説となっている。例えば天平感宝元年の写経検定帳の「真弓紙」や、或は天平感宝元年のものと考えられている、用紙並筆墨検定文案の「真弓紙」がそれである。

さて、この檀紙が同じ時代の真弓紙と同じものであるという点については、私にも何等異議がない。それは穀紙を加地紙と書いたり、或は梶紙と書いたり、或はまた楸紙を久木紙と書いたりするのと同じ使い方であろう。しかし、ここに問題としなければならないのは、その檀紙即ち真弓紙なるものが、果して何を原料として漉いた紙のことであるかという点である。

日本でいう檀即ち真弓と称する木は、植物学上では「やまにしきぎ」である。そして中国の昔の檀は、必ずしもこれと同じものではないらしいが、しかし、それが古く詩経（漢以前）に既に出ており、日本の檀即ち真弓に似た木であり、しかもそれが、非常に強靱な木であるという点では、日本の真弓とかなり類似した木であると思われる。そんなことから、中国の檀を、日本の「まゆみ」にあてて、これを檀と叫んだのであろう。ただ、檀紙とか麻紙とかいうものは中国から伝えられた紙の名称であると思われるが、その中国の檀紙なるも

のが、果してまゆみの木の皮を原料とした紙であるかどうかは、極めて疑わし
ようである。

私は以上のような点から考えて、この檀紙は、本来は中国の檀紙（たんし）
のことであろうという新しい見解を発表した。（「紙及パルプ」第12巻第10号）。

檀の木の皮は、麻や穀と同じように、古くから中国の重要な製紙原料の一つ
であり、かの有名な宣紙（せんし）は、檀皮と藁とで造ったものである。日本
にはこの木がないので、その和名などもないが、榆科の植物で、中国の昔の檀
（たん）と似た木であり、そんなことから、檀紙は檀紙であるとも考えられて、
我が国では専ら檀紙の字を用い、しかもその檀の木を日本のまゆみにあてたの
で、これを真弓紙としたのであろうと思われる、中国の宣紙即ち檀を用いた紙
は、色が純白で、質は強く、虫が食わないから保存によく、紙の感じは、日本
の奉書紙に似ている。これ等のことは、明治39年に、内山弥左衛門氏が詳しく
実地の調査研究を発表していただける。

正倉院文書の檀紙については、前にも記したように、すでに「紙及パルプ」
に私見を詳しく発表した。その際私は、中国の古い時代の檀は、果していかな
る木であるか、ハッキリは分らないが、しかし、或は現在の檀をも含めて檀
と言っていたのではあるまいかと、一つの想像説をつけ加えておいた。ところが、
最近手に入れることの出来た、「中国造紙発展史略」という本を見ると、
その21頁に、「宣紙又名玉板紙」の項があり、それに、この紙の産地は安徽省の
涇懸で、これは唐朝には宣州府に属していたので、その紙を宣紙と言ったが、
原料は「檀樹皮」と「稻草稈」であると記し、即ち檀の字を用いなくて檀の字
を用いている。これは私の想像した通り、檀と檀とが同じもの、或は殆んど同
じものを指していることの一つの現われではあるまいか。即ち、私の提唱した
檀紙は檀紙のことであるという推定説を、裏書してくれているようである。こ
の本は、1957年に、北京の軽工業出版社から出版されており、著者は「洪光
黄天右」の2人となっている。なお、檀の説明も載っていて、それには「檀樹
在植物学上属于榆科，是一种落叶乔木」と記されている。そして宣紙の説明に

は、「宣紙的特点是純白，細密，柔輒，均勻，顔色經久不變」とある。この本は、畏友篩田統博士の恵贈によるものである。記してもって感謝の意を表したい。

VI 斐 紙

これは雁皮（がんび）という木の皮を原料として漉いた紙である。天平勝宝3年の写書所解に「斐紙」とあり、同じ年の写書所紙軸緒装漢充納帳には、更に「斐厚紙」の名も見えている。なお、天平勝宝2年の文書にある「肥紙」というのも、同じく斐紙を指すものであることは明らかであろう。雁皮紙のことについては、最近、畏友浜田徳太郎氏が、「紙及パルプ」誌の第13巻第4号に詳しい考察を載せられた。そして、その中で、「斐」は「斐麻」（ひを）の斐であって、古くは「かにひ」とも呼ばれたので、それが雁皮（がんび）に変わったものであると説いていられる。尤も、古く中国でこの木のことを何と言ったかは不明であって、これを蕘花にあてるのは誤りらしい。中国には、斐とか或は雁皮とか言う言葉も見つからない。またそれが紙の原料として使われたという古い記録も見当らないようである。なお、かにひという名が平安時代の本である「医心方」に「荒花，加爾比」とあり、また枕草子に「かにひの花」の記載もあって、それが雁皮もしくはそれに類する植物であることは、すでに「大言海」などにも記されている通り、周知の事実である。ただ、ここでやや疑問なのは、かにひがかみひの転じたものであるとすると、紙の原料として斐を用いたのは天平時代あたりからであろうから、それ以前は、この木は果して何と呼ばれていたものであろうかということである。思うに、更に古くは、斐紙の名称から見て、恐らくはそれが「ひ」又は「ひを」と称されていたものではなかろうかと想像される。これは一番都合のよい考え方でもある。しかし、この考は全くの私の想像説であることを明らかにしておく。

ところで、斐紙が仮りに中国にない原料を使った紙であるとする、これは日本の発明なのであろうか。中国のいろいろの古い文献を調べてみるけれども、この雁皮紙のことが出て来ないのである。即ち中国の紙の原料は、最も古

い絹の紙をはじめとして、麻、楮（穀）、海苔、桑、竹、藤、麦、稻等である。また、新しい研究書として、1955年に出版された「中国造紙用植物纖維図譜」を見ても、この他に棉や三椏（みつまた）があげられ、更に蘆とか荻とか高粱とかいうような、禾本科の植物が2、3見えてはいるが、日本のがんに相当するような紙の原料は出て来ていない。更にまた、前に一度名をあげた、「中国造紙発展史略」という本にも、前記以外のものとしては檀紙（檀紙）をあげているのみで、斐紙もしくはそれに類する紙のことは現われていないのである。或は古く、単に「樹膚」と記してあるものの中に、穀と一緒に雁皮なども含まれていたものなのであろうか。とにかくこのことは誠に興味ある問題である。そしてしかも、紙の王者とも言われる雁皮に関する古い文献が、果して中国にあるのかないのか、そして更に、中国でその実際の古い紙が現在知られているのかいないのか、またそれが日本の発明であるのかないのか、そういう問題について、従来日本の学者も外国の学者も、殆んど誰も触れていないのは誠に不思議である。私も今日まで、ただ漠然と雁皮を考えていて、この問題を少しも疑って見たことがなかったのである。なお、参考までに記しておく、正倉院に現存している日本製の紙の中には、かなり多くの雁皮のあることは明らかである。しかし中国から伝えられたと思われる紙は、殆んどが穀紙又は麻紙であって、雁皮はないのではないかと考えられる。

Ⅶ 葉 藁 紙

天平勝宝6年の写経雑物出納帳を見ると、そこに「葉藁紙」の記載があり、また天平勝宝4年乃至宝字元年の文書には、更に「波和羅紙」又は「波和良紙」の名も見えている。そしてこれが、現在やっていると同じく、稻の藁を原料として漉いた紙であることは、殆んど疑う余地もあるまい。一般にこれらの禾本科の植物の紙は、腰の強いのが特徴である。尤も、どの原料の場合でも言えることであるが、紙は漉き方によって感じがかなり違って来る。またいろいろの原料を、そのもの単味で漉くだけでなく、お互に配合しあって漉くことも古くから行なわれている。このことは、現存している正倉院宝物の紙を調べてみれ

ば、まさに一目瞭然であろう。従って雁皮紙といっても楮入りの雁皮紙もある訳だし、反対に、楮紙といっても、時としていくらか雁皮の入っている場合もある訳である。麻紙や檀紙の場合でも、このことが当然行なわれたであろうかと思われる。

VIII 杜 仲 紙

杜仲と称する木は、中国の最も古い本草書であるところの「神農本草経」に既に現われている薬用植物であって、「思仙」とか「思仲」とかいう異名もある。私はかつてその木の皮をとって実験して見たことがあるが、「本草綱目」にもある通り、「其皮中有銀絲，如綿，故曰木綿」であって、この皮を折ると銀絲のような極く細い糸が一杯出て来る。しかしこの材料は、それで紙が漉けるような立派なものではない。蓮の糸とか、或はくもの糸のような、誠に利用しにくいものである。これ等のことから考えると、杜仲そのものの繊維で紙を漉いたとは到底考え得ないところである。然らば天平時代の杜仲紙とは果して何であろうか。

ところでこのことを述べるに当って、まず当時の記録の方をあげてみると、天平19年の写経疏間紙充装漢帳に「杜中紙」とあり、更に天平勝宝4年乃至宝字元年の文書にも同じく「杜仲紙」とある。そしてこれ等の記録の杜仲の名は、どう考えてもその紙の原料名としか受けとれないものなのである。そこで私の考えたのは、この場合の杜仲紙とは、これは所謂杜仲を原料とした紙のことではなくて、それとよく混同される、本当の木綿（もめん）の紙のことではあるまいかということである。杜中のことを一名木綿もくめんと言ったことは、前記の「本草綱目」などもその例であるが、もっと古く、例えば日本の平安時代の「倭名抄」を見ると、「杜仲，陶隱居曰，杜仲一名木綿，和名波比末由美，折之多白絲者也」とあり、また同じ時代の「本草和名」には、「杜仲一名思仙，一名思仲，一名木綿，陶景注云，折之多白絲，一名大戊……和名波比末由美」とあって、日本はもとよりのこと、中国でも、杜仲のことを古く木綿と言っていたのである。なお、畏友浜田徳太郎氏に依ると、魏の「吳晋本草」に既に

「杜仲一名木綿」という記録が現われていることを、南方熊楠氏が指摘されているという。但し、日本で「はいまゆみ」即ち「まさき」を杜仲にあてたのはこれは全くの誤りである。

ところが、次に本当の木綿のことを調べてみると、中国では後魏の時代の「齊民要術」という本に、「木繇，樹高大，実如酒杯，口有繇，如蚕之繇也，又可作布，名曰白縹，一名毛布」とあって、明らかに木からとれる木綿のことを記し、また「南史」の高昌国の条には草の方の木綿についての記載があり、更に「続博物志」には草の方の「木綿」の栽培のことをも記している（詳しくは拙著「万葉染色の研究」179—183頁、並に「生活文化研究」第4冊拙稿参照）。しかも一方、中国の古代の紙を検討してみると、中華民国44年に発行された「大陸雑誌」第10巻第2期によると、スブン・ヘデン氏が古楼蘭で発見した西紀3世紀頃の紙が、その材料たる麻と一緒に、綿花の繊維をも含んでいることを明らかにしている。そしてこのことは、R・H・クラッパートン氏の著書に出ていると記している（李書華氏筆「造紙的發明及其伝播」）。

以上のことから、私は日本の上代の杜仲紙というのは、実際は杜仲ではなくて、それとよく混同されていた、木綿の紙のことであろうと想像している訳である。ついでに一言すると、日本では、天平時代は勿論のこと、平安時代になっても、前記のように、木綿（もくめん）は杜仲の一名であると思っていたようである。しかし平安時代の始めには、それとは別に、草の方の「綿」の実が入り、これを栽培した。但し、このものを木綿（もくめん又はもめん）と言うようになったのは、恐らくは平安中期以後位のことではあるまいか。

IX 久木紙

久木の紙については、2つのものを考えることが出来る。1つは、天平6年の造仏所作物帳にある「比佐宜染」（ひさぎそめ）の紙のような例で、これは明らかに楸葉をもって染めた茶色の紙のことであり、殆んど疑う余地がなかろうかと思われる。ところがこれとは別に、もう1つ、楸の木を皮を原料として漉いた紙ではないかと思われるような記載が、2、3の場所に出て来るのであ

る。例えば天平勝宝4年乃至宝字元年の文書と考えられる経紙出納帳を見ると、そこには、波和良紙、白麻紙、杜仲紙等と並んで「楸紙」が出て来ているし、又天平3年の写経目録には、竹幕紙と並んで「比佐木紙」とある。なお、天平勝宝2年の経紙並表紙用帳に「久木紙」とあるのも、やはり同じものであるまいかとも思われる。ただ、天平時代の文書は、書いた人がいろいろ違っていて、そのために同じ胡桃染の紙のことでも、或る人は「胡桃染紙」と書き、或る人は単に「胡桃紙」と書くというように、必ずしもその書き方が一様ではないことがある。そう考えると、この場合も、或はすべて楸染の紙のことであろうとも考え得られるように思われて、どうもハッキリしないのである。ところで、それでは楸の木の皮で紙が漉けるかどうかという問題を記すと、実験によるに、楸の皮はかなりよい靱皮繊維をもっていて、紙漉には充分利用出来るのである。ただ、その皮が、紙の原料としてははかぢに劣っており、この点、穀や雁皮などに比べると不便であり、従って、原料の不足に困った場合でもないと、これを実際に利用したことは考えにくいようである。

以上、いろいろ考え合わせてみると、久木紙が、久木（楸）の樹皮を原料とした紙であろうということは、多少無理であって、或はそうでなく、久木染の紙のことであるかも知れないと思われる。しかし、とにかく、これを原料名と考え得られそうにも思われるので、一応、参考までに記し、今後の研究問題としておきたい。

(附) 布 紙

布紙のことは、天平勝宝2年の経紙出納に「布紙」と記され、また、天平19年の写経疏間紙充装漢帳には、更に「白布紙」ともあり、特に白くした「布紙」もあったものと思われる。これ等の布紙と称するものは、多分、布を原料として造った紙という意味であろう。日本で古く布と言ったものには、実際は麻類の織物と、木綿（ゆう）即ち穀や楮の繊維の織物との2つがある。布紙とは、それ等のものの、裁ち屑とか、或は不要のものをこまかく切って、それを処理して紙に漉き上げたもののことである。古い破れ裂なども利用されたかも知れ

ない。布を截って紙の原料を造ったことは、そもそも中国で紙が初めて発明された時からの古い手法である。殊に麻の繊維の場合などは、それを紙の原料にする際、ただ臼で搗いただけではうまく叩解されない。どうしても短かく切ってやる必要があるのである。この点から考えると、布の裁ち屑の利用などは、最も都合のよい製紙方法であるということが出来よう。

む す び

以上、正倉院宝物の紙についていろいろ記して来たが、要するにこれは古い紙の原料についての問題である。尤も、当時麻紙と称されたものが必ずしも麻を原料とした紙に限られていたかどうかは、それはまた別な問題である。檀紙や杜仲紙も同様である。即ち、これ等のものを原料とした紙にはそれぞれ特有のふうあいがあり、それに似たふうあいの紙は、原料が違っていても、やはり同じ名で呼んだことであろう。このことは、現在でもまた同様である。

なお、念のために最後に一言すると、私のこの研究は、別に記す上代の染紙その他の加工紙の調査研究と一緒にして、1つの論考を形づくるものであり、しかもそれは、現在私が同学の諸研究者と協同行なっている、正倉院宝物の紙の実際のもの調査研究に役立てるための、1つの予備的な仕事である。なお、それ等の実際の宝物の紙の研究については、いずれ更めて、共同研究者と共に、公式に発表する筈であるので、それ等をも併せて御覧願えるなら誠に幸である。

昭和37年春

銀閣寺畔、月待山々麓にて識す